



出版案内 「17歳は世界をひらく」 守随吾朗著（高文研）

倉林 順一（ぐんま教育文化フォーラム）

ライフヒストリー

2023年8月に、わが「フォーラム」会員で元高校教師の守随吾朗さんが「17歳は世界をひらく」を出版した。内容は氏の生い立ちから始まり、高校教師となって関わった高校生の自主活動の歴史を振り返るもの。これを「今を生きる17歳の高校生である『君』に読んでもらい、自らの高校生時代をきり開くときの参考にしてもらいたい」と語りかける形で話が進行する。『君』は著者の思いにほかならない。

章立ては「序章」に始まり、第1章「生まれと育ちの意味」から「大学を卒業し群馬へ」「闘いの中で 教師集団と高校生たち」「70年代の登場」「地域の発展と高校生活動」「不当配転に至るまで私は館林高校で何をしてきたか」…と続き、第10章「総括、四期の高校生活動とつながり」で終る。結婚、子どもの誕生、ももの木保育園認可運動にも触れているからこれはまさに守随吾朗のライフヒストリーだ。

1962年館林高校板倉分校赴任

この年、著者は高校生につれられるようにして「群馬高校生連絡協議会（群高連）」の結成に立ち会い、「高校生活指導研究協議会（高生研）」誕生前の学習会に参加するなどして、精力的に高校生の「育ち」について学び始める。それが「サマーキャンプ」への取り組みにつながっていく。群高連の議案書を読んだ『君』は「高校生が学校間を乗り越えて連帯する！そんな発想ありませんよ！」と驚きをみせる。

矢島雅彦君のこと

第4章「闘いの中で」に、1969年12月26日に富岡高校2年、17歳の矢島雅彦君が鏑川河畔で焼身自殺をとげたことの詳細が書かれ

ている。衆議院議員選挙の前日であった。10頁に及ぶ遺書が残されていた。

高校生の政治活動禁止！

ふざけるんじゃない。現在社会の人を造っているのは政治じゃあないか。社会のすべての人々が政治によって造られているではないか。政治運動とも僕たちが社会に目を開く一番の勉強ではないか。〈略〉ある一部高校生が政治、日本の政治に目を通して行動している。その広い視野をもつことをゆるさず、文部省は高校生に何を求めているんだ。ただ利のためのこせこせして中味のない勉強をさせればいいのか。～

（矢島君の遺書より）

この2ヶ月前に文部省から発出された「高校生の政治活動禁止通知」に対する抗議の行動であることは明らかだったが、F校長は「多分ノイローゼだろう。原因追及はやめたい」と言ってのけた。

直接には矢島君たちと接触する機会は持たなかった著者だが、このことに大きなスペースを割いたのは、群馬県の高校生の自主活動を語る上では大きな意味を持つできごとと位置づけているからだろう。著者は高校生の自主活動を守るために一貫して当局からの攻撃と闘った。

「寄り添い職人 守随吾朗」

著者は群馬県の教員になった時から、地域の中学生や高校生の自主活動の場として館林の自宅を開放した。守随学校とよばれた。ここから育った今泉重紀が「解説」に書いている。

「不得手の積極策よりも、相手に寄り添い、気づかせること、ヒントを与えることが、守随吾朗が磨き上げてきた必勝パターンなのです。〈略〉これって、つまり、自主活動への支援そのものではないでしょうか。」

◇頒価 3850円（税込）

